入谷仙介著

『西遊記』の神話学

孫悟空の謎

中公新書

1418

学院图书馆
书章

中公新書 1418

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

入谷仙介著

『西遊記』の神話学

孫悟空の謎

中央公論社刊

入谷仙介（いりたに・せんすけ）

1933年（昭和8年），兵庫県に生まれる．
1956年，京都大学文学部文学科卒業．京都大学大学院文学専攻科博士課程修了．
現在，島根大学名誉教授．文学博士．中国文学専攻．
著訳書『高啓』（岩波書店）
『古詩選』（朝日新聞社）
『宋詩選』（朝日新聞社）
『西遊記』（筑摩書房）
『王維研究』（創文社）
『頼山陽・梁川星巖』（岩波書店）
ほか

『西遊記』の神話学
中公新書 *1418*
©1998年
検印廃止

1998年5月15日印刷
1998年5月25日発行

著　者　入谷仙介
発行者　笠松　巌

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104-8320
東京都中央区京橋 2-8-7
電話　販売部 03-3563-1431
　　編集部 03-3563-3666
振替　00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあります．
◇落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください．送料小社負担にてお取り替えいたします．

Printed in Japan　ISBN4-12-101418-9 C1297

はじめに

『西遊記』は中国の古典的な長編小説の中で、わが国でもっとも広く親しまれている作品であり、早い時期から、講談・絵本・漫画・演劇・映画・ラジオおよびテレビドラマなど、あらゆる形式の大衆的娯楽作品に作り替えられて、子供の世界を含む、大衆的レベルで普及してきた。『水滸伝』『三国志演義』なども広く親しまれているが、『西遊記』には及ばず、ことに子供の世界への入り方では問題にならないといってよい。このことは、『西遊記』には、他の中国古典小説では希薄な、文学としてのある普遍性が存在することを示唆する。本書は、その普遍性は、人類の幼少年時代の精神の記憶である、古い神話を下敷きにしていることに求め、現代の比較神話学の成果を借りて分析し、『西遊記』がギリシア、インド、その他ユーラシアの古い神話、説話を吸収して、それ自体が一つの宇宙的な巨大な神話的世界を築きあげたことを明らかにしようとした試みである。

本書が主として依拠したのは、ジョルジュ・デュメジルおよび、日本においてデュメジルを祖

述して、大きな成果をあげている、大林太良、吉田敦彦の諸業績である。その基本的な考え方は、神話の比較研究において、表面的な差異にとらわれず、神話の骨格を成す基本的な要素、モティーフが何であるかを探り、それらの要素、モティーフの共通性によって世界各地の神話の関連性を明らかにしようとするものである。この方法を活用することで、本書において『西遊記』の深層に隠れていた構造を解明することが可能になった。本書の叙述は筆者の思考の展開に即していて、必ずしも原作のストーリーの順序ではない。

『西遊記』のテキストについて、本書理解に必要な範囲で、簡単にのべる。西遊記物語のもっとも古い形を伝えるのは、宋刊の『大唐三蔵取経詩話』（一名『三蔵取経記』）であるが、これはきわめて簡略なものである。元朝になると、より内容の豊富な刊本が存在したことは、高麗で編集された中国語の教科書『朴通事諺解』に引用されていることで明らかであるが、本自体は消滅して現存しない。明初に編集された大規模な百科全書『永楽大典』に、『西遊記』の一部分の引用があり、元本より内容のふくらんだと推定される明初刊本が存在したものと考えられるが、この本も現存しない。明代の刊本はいくつか存在するが、そのうちもっとも重要なのは万暦二〇年代（一五九〇年代）に南京で刊行された世徳堂本である。この本は中国の北京図書館、日本では天理図書館など、二、三の図書館に所蔵されている。いずれも保存があまりよくなく、不完全であるが、現存する『西遊記』諸本のほとんどが、この本を祖本とするものと思われ、内容ももっとも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

分量が多く充実している。世徳堂本とほとんど同じ内容なのが李卓吾批評本で、小野忍、中野美代子による岩波文庫の訳は、この本を底本としている。世徳堂本とは微妙な相違があるようである。

世徳堂本はかなり冗漫なので、清代に入って、簡略化した本が広く行われ、何種も出ているが、その代表的なのが『西遊真詮』で、鳥居久靖、太田辰夫による平凡社中国古典文学全集の訳は『真詮』を底本とする。本書で通行本というのは、『真詮』を中心とした清代の省略本を指す。省略によって、読みやすくなり、読者に喜ばれたが、重要な意味を持つ部分を無雑作に削った部分もあり、研究上は問題がある。『西遊記』研究には世徳堂本がもっとも重視されるべきであろう。中国で現在、影印出版の計画があると聞く。早急な実現が望まれる。本書が底本として用いたのは、一九五四年、北京の作家出版社が北京図書館の世徳堂本を底本とし、不完全な部分や疑問のある部分を他本で補訂した活字本である。本書では天理図書館蔵世徳堂本をも部分的に参照した。作家出版社本にも問題があり、その欠陥を補ったという本も中国で出版されているが、作家出版社本が正体字をもちいているのを、現行の簡体字に改めていて、テキストとしての信頼性が不十分なように感じられる。本書では各回の回数は作家出版社本により、書名の『西遊記』は省略した。なお筑摩書房の世界文学全集に収めた拙訳は、抄訳ではあるが、作家出版社本を底本とする。

最後に強調したいのは、いかに世界の神話的モティーフを豊富に取り入れているとはいっても、

『西遊記』は中国文学の傑作であるということである。古来、中国人は他民族の文化を貪欲に吸収し、ほとんど痕跡を残さないまでに徹底的に消化する能力にたけた民族である。それなればこそ、あの偉大な中国文化を築き上げたのであり、『西遊記』はこの中国人のすぐれた能力の一つの大きな証（あかし）であると私は考えるものである。

目次

はじめに
アテーナーから観世音へ……3
女神の零落……31
天の簒奪者……45
パーンドゥ五王子……67
ヘルメース・プロメーテウス・ヘーラクレース……89
祭司・戦士・生産者……111
孫悟空と猪八戒……137
猪八戒はイノシシかブタか……175
『西遊記』の根元テーマ……205

あとがき　232
参考文献　237

挿図タイトル

観世音が猪八戒を帰服させる／孫悟空の冥府討ち入り／観音院で三蔵が袈裟を見せる／亀が浄瓶に全世界の海水を盛って観世音の前に現れる／車遅国で孫悟空が煮え立った油鍋に入る／霊山に到着すると、三蔵一行の前に渡し舟が現れる／猪八戒が目隠しをして莫家の女たちをつかまえようとする／霊感大王が凍らせた通天河を三蔵一行が渡ろうとする／滅法国で一行が大櫃に隠れ、盗賊に盗み出される

本図は天理大学附属天理図書館蔵の『世徳堂本 西遊記』による。

『西遊記』の神話学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

アテーナーから観世音へ

1

小説『西遊記』は周知のごとく、天竺霊鷲山大雷音寺の釈迦如来のもとに秘蔵されている三蔵の大乗仏典を、衆生済度の大願のため中華の国にもたらすべく旅立った、玄奘三蔵法師と、三人の異形の従者との、怪奇かつ困難な旅の物語である。一行はかような広大な功徳を施すための、やむをえざる試練として、多くの妖怪との闘争を経験する。闘争はしばしば危険である。従者の筆頭で恐るべき神通と怪力の持主である、孫悟空の手にあまることさえある。しかし三蔵の崇高な動機と敬虔な信仰とは、如来を頭とする仏菩薩や神々に支援され、いかなる危険をも最後には克服する。

三蔵一行を援助する神仏は数多いが、ひときわめだって活躍するのは観世音菩薩である。最初、取経の僧を求めて如来の命で長安に使してから、最後に経を得て中国に帰る三蔵一行の道中の試練が必要な数に達せぬことを発見、如来に報告するまで、陰になり日なたになり、一行の危急を救うこと数知れず、一行の運命に対して、もっとも重要な影響を持つ。これほど終始一貫して一行の運命にかかわりを持つ神仏は、如来を除いて見あたらない。

この菩薩が何ゆえにこれほどの役割を『西遊記』において果たしているのか。それがお話の筋書だからといってしまえばそれまでのことである。観世音が民間でもっとも広く親しみをもって崇拝された菩薩だったこともあずかって力があるにちがいない。だが、私は古代ギリシアの叙事詩『オデュッセイア』と『西遊記』とを比較することにより、観世音の活躍は、それ自体、西遊記物語の中の一つの重要なモティーフをなすもので、他の、三蔵一行の特定の苦難にのみ登場して、彼の危険を救う神仏とは異なった役割を果たしているのではないかと考えるに至った。ここにその根拠を示して、文学としての『西遊記』を解明する手がかりとしたい。

2

まず、いささか煩雑であるが、『西遊記』中の観世音の行動を跡づけてみよう。

(1) 天上の蟠桃会に赴き、天宮の荒廃しているのを見て、その原因をたずね、孫悟空の暴状を知り、悟空討伐のため、従者の恵岸行者を派遣する。恵岸が敗れたので、二郎神を悟空追捕の将として推挙する（第六回）。

(2) 天上から二郎神と悟空との戦いを観戦、二郎神に助勢のため浄瓶を投げようとして太上老君に押しとめられる。老君が金剛琢を投げて悟空は捕らえられる（第六回）。

(3) 如来の命令で渡天取経の人を求めるために長安に旅し、途中、天罪により苦しんでいる沙悟浄、猪悟能、小龍、孫悟空の四怪に、取経僧に従って天竺へ行けば、罪が許されると教える（第八回）。

(4) 唐帝太宗の夢中に出現、帝を苦しめる涇河龍王の亡霊を退ける。ここでは観世音を「女真人」としている（第一〇回）。

(5) 乞食坊主に化身、長安の町で袈裟・錫杖を売り歩き、宰相蕭瑀に見出され、太宗に目通りし、袈裟・錫杖を太宗発願の水陸大会の導師の玄奘に与え、『大蔵経』を求めて天竺に旅立つことを命じて姿を消す。この間に玄奘の前身が如来の弟子の金蟬子で、唐土へ転生するとき、観世音が霊魂を送ったことが明らかにされる（第一二回）。

(6) いったん弟子にした孫悟空に逃げられ、とほうにくれている玄奘（三蔵）の前に老女に化身して出現し、悟空を服従させるために緊箍呪を授ける（第一四回）。

(7) 孫悟空の請いで、蛇盤山の小龍を白馬に変じ、三蔵を乗せていかせる（第一五回）。

(8) 孫悟空の請いで道人に化身し、黒風山のクマ怪を収伏、守山神とする（第一七回）。

(9) 孫悟空の請いで、流沙河に恵岸を派遣し、沙悟浄に一行の渡河と天竺への随行とを命じる（第二二回）。

(10) 三蔵一行の道心を試そうとする女神、黎山老母の計画に加わり、文殊、普賢の両菩薩とともに、美女に化身して一行を誘惑する（第二三回）。

(11) 孫悟空が万寿山の大仙、鎮元祖師の秘蔵する、不老長寿の霊木、人蔘果を打ち倒して枯らしてしまったので、悟空の請いにより蘇生させる（第二六回）。

(12) 孫悟空が金角・銀角の二怪を捕らえたところへ太上老君が出現し、二角は老君の召し使う童子で、観世音が三蔵の信仰を試みるために、借りうけて妖怪に仕立てたことを明らかにする。悟空は怒って、「該他一世無夫」（やつは一生亭主を持てねえがいいや）と観世音をののしる（第三五回、ここでは直接出現しない。悟空ののしりは流布本である『西遊真詮』では削られている）。

(13) 孫悟空の請いで、にせの蓮台の計を用い、魔王紅孩児を捕らえ、善財童子とする（第四三回）。

(14) 孫悟空の請いで寝乱れ姿のままに通天河のキンギョ怪を捕らえ、魚籃観音と現身する（第

四九回)。

(15) 老女に化身して孫悟空の前に出現し、毒敵山のサソリ怪に勝つのは昴日星官であることを教える(第五五回)。

(16) 孫悟空が三蔵に勘当されてたずねてきたので、三蔵の災厄を予言してひきとめる。沙悟浄はにせ悟空にうばわれた荷物を取り返すために悟空の旧居水簾洞をたずね、にせ悟空に追い返されて観世音に訴え、両悟空の争いとなり、観世音にも見わけられず、如来の判定で決着がつく(第五七~五八回)。

(17) 朱紫国で孫悟空が犼怪賽太歳を退治しようとしている時に出現、これが自分の騎獣で、朱紫国王の罪を罰するために派遣されていたことを明らかにして連れ帰る(第七一回。犼は想像上の怪獣でイヌに似て人を食い、口から火を噴くという)。

(18) 天竺に到着、経を持ち帰ろうとする三蔵一行が長安まで八日で往復せねばならぬことを如来に報告する(第九八回)。

(19) 三蔵の遭うべき試練の一回の不足を発見、揭諦を派遣して帰路の一行を通天河に沈ませる(第九九回)。

以上、『西遊記』に見える観世音の諸活動を通観すると、いくつかの特徴が見られる。

第一に、観世音は(4)によると女性である。なお「女真人」は種族としての女真人と、女性の真

人＝神仙としての女真人との二様に解することができるが、観世音を東北中国の少数民族であった女真人と関連づける意味は全く考えられないから、後者として理解する。しかも処女神と考えられているらしい。(12)における孫悟空ののしり、「該他一世無夫」は、観世音が処女神たることを前提とせねば意味をなさぬ。この一句が欠けているために、『真詮』では観世音、ひいては『西遊記』全体にかかわる問題が不明瞭になっている。(14)魚籃観音のくだりで、観世音が寝乱れ姿で示現したというのも、処女神であるところから特殊な興味をねらったもののようである。なおこの点については、後述するように、『西遊記』以外の他の資料により補強することが可能である。ただし玉帝などに対する改まった物言いの場合、観世音自身が貧僧と自称するから、男性神のように考えられている面もあるようである。

第二に、観世音はそのすばらしい神通力にもかかわらず、最高の神格でなく、その上に最高神たる如来が存在する。観世音は決して如来の道具でなく、多くの場合に独立した神格として自己の判断と意志とで行動する。しかし行動の大枠を規定するのは如来の意志、あるいはそれをすら超えた運命の意志であって、観世音のなしうることは、そうした大きな意志を執行すること、小説に即していえば、三蔵一行を途中予定された試練をくぐらせながら天竺へ送りとどけ、経を持たせて帰すことである。(16)でのように、手にあまって如来の力を借りることもある。

第三に、三蔵を中心に考えると、天竺旅行はある意味での帰国であり、物語は流謫の英雄の帰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl